

多摩大学附属聖ヶ丘中学校

二〇一九年度入試問題

# 国語

第一回（二月一日午前実施）



二〇一九年度

入学試験問題

(二月一日午前)

国語

多摩大学附属聖ヶ丘中学校

- 一 開始の合図があるまで問題用紙・解答用紙にふれないでください。
- 二 開始の合図があったら、最初に問題用紙十ページ、解答用紙二枚を確認してください。
- 三 解答用紙に受験番号と氏名を記入してから始めてください。
- 四 問題についての質問は受け付けません。印刷のはっきりしないところや用事がある時は、声を出さずに手をあげてください。
- 五 字数が指定されている問題は、記号・句読点も一字として数えてください。
- 六 問題用紙は回収しません。
- 七 筆記用具の貸し借りはしないでください。
- 八 試験時間は五十分です。終了五分前になったら知らせます。
- 九 答案を書き終わっても座席からはなれないでください。

次の(1)～(5)の——線部の漢字をひらがなに、(6)～(10)の——線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- (1) 先生の声色（線部）を使って皆（みな）を笑わせる。
- (2) 父は身を粉（線部）にして働いている。
- (3) 最近は日の入りが早くなった。
- (4) 山で嵐（あらし）に遭（あ）い、這（ほ）う這（ほ）うの体で下山した。
- (5) お土産（みやげ）に一對（めおと）の夫婦茶碗（ぢやわん）を買い求めた。
- (6) 雪崩（なだれ）を知らせて事故をミゼン（線部）に防ぐ。
- (7) 彼（かれ）は非常にホウヨウリヨクのある人だ。
- (8) 意見が対立してシユウシユウがつかない。
- (9) 社会人と学生のコンセイチム（線部）を作る。
- (10) タントウチヨクニユウ（線部）に質問する。

二

次の(1)～(5)の各文の( )にあてはまるものを、あとのア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) めきめきと頭( )を現す。

(2) 破( )の勢いで進撃する。

(3) ( )血を注いで作った作品だ。

(4) 相手は子どもと( )を括る。

(5) 怠けている選手に( )を入れる。

ア 竹    イ 活    ウ 高    エ 角    オ 心

次のカタカナの文章を読んで、漢字とひらがなと読点を正しく用いて書き直しなさい。

アシウラニハカラダジュウノツボガアツマツテイマス。テアシガヒエルトカアシノムク  
ミナドアシニカンスルナヤミガオオイノモウナズケマス。アシツボハゼンシンノカクキ  
カントノカンレンセイガタカクゾウキニイジヨウヤキノウテイカナドガオコルトタイオ  
ウスルアシツボガカビンニナリマス。ソノタメダイニノシンゾウトモヨバレルコトガア  
リマス。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(なお、作問の都合上省略した部分があります。)

自然に向き合う姿勢について、私は以前からアイヌの物語などに関心を持っていました。童話や民話という形で表現されているので、はっきりとは書いてはありませんが、<sup>①</sup>アイヌの人々が、動植物を自分たちと同じように見たり、自然に畏れや敬意、いたわりをもっていることが伝わってくるものが多いのです。

最近になって『アイヌ語の贈り物』という本が出ました。副題に「アイヌの自然観にふれる」とあったので、さっそく手に入れて読んでみました。

この本の中で、私はアイヌの地名表現について書いた箇所が目がとまりました。アイヌの人々は生き物の命をたいせつにしただけでなく、土地もまた生き物であると考えていた、ということが述べられています。たとえば川の本流と支流のことをそれぞれ「ポロ・ペツ(親の川)」と「ポン・ペツ(子供の川)」と言ったり、川にも年齢があるかのように「オンネ・ナイ(年とった沢)」、「ライ・ペツ(死んだ川)」と言ったりするそうです。

そうした表現の中には、私たちには奇妙に思えるものがあります。水源のことを「ペツ・エトウ(川に行く先)」、河口を「ペツ・プツ(川の入口)」と言うのだそうです。川は上から下に降りるものですから、これでは逆に川が海から山にのぼって行くかのようなのです。けれども、このことはサケの側に立つて考えれば納得できます。

私は思いました。<sup>②</sup>最新の生態学によって説明されたことを、アイヌの人たちははるか昔から知っていたのではないだろうか。自然を理解するには、地形をたんなる無機物質の起伏と見るのではなく、命あるものとみなし、また、川を水が上から下に降りる管のように見るのではなく、親子のようにつながり、生まれては死んでゆく生き物ととらえる。そこは海からのぼってくるサケが生きる場所であり、サケは周りの生き物を生かし、森を豊かにする——そのことをアイヌの人たちはごく自然にわかっていたのではないかと思うのです。私には、アイヌの人々が子供たちに、次のように話しているのが聞こえるようです。

川は(あ) だろう? だからやさしくしないといけないんだよ。川はサケの生きる場所だろう? 海からふるさとに戻ってきて、一生を終えるために上へ上へとぼってゆくサケにとつて、河口は入り口であり、水源は終点なのだよ。サケは死ぬことよって新しい命を残し、自らはクマに食べられ、私たちを生かしてもくれる。そうして(い)は

つながっているじゃないか。

アメリカのレイチェル・カーソンという人が書いた、『沈黙の春』という本があります。一九六二年の出版ですが、カーソンが調査、執筆をしていた一九五〇年代はまだ第二次世界大戦が終わったばかりの頃でした。アメリカは、その合理主義、効率的な生産体制、大規模な機動力などによって、第二次世界大戦の戦勝国となり、世界のリーダーとなりました。アメリカの国民は自信に溢れ、さらなる発展を期待していました。農業生産も同じ動きの中にあり、生産力アップのために、殺虫剤が大量に生産され、大規模に撒かれました。生物学を学んだレイチェル・カーソンはその問題に気づき、徹底的な調査をおこなった結果、こういうことを続けていたら、野山から動物はいなくなり、私たちの子供によい環境を残すことはできないと確信しました。カーソンはそのような未来を、（うー）がない春にたとえ、「沈黙の春」ということばで表現したのでした。

その頃、アメリカの大統領はジョン・F・ケネディといい、四〇代の若くてさっそうとした大統領でしたが、彼は、カーソンの『沈黙の春』を読み、感銘を受けて、ただちに殺虫剤の使用制限の法律を通したのでした。

そして、これ以降、世界は環境のことを考えるようになったと言つてよいと思います。カーソンの書いた一冊の本が世界を変えたのです。彼女は自然のすばらしさ、とくに生物のすばらしさを深く理解した人で、その文章は論理的であるだけでなく、詩のように美しくもあります。

そのカーソンの数あるすばらしいことばの中でも、私がとくに好きなのは『沈黙の春』にある次のことばです。

「私たちのすんでいる地球は自分たち人間だけのものではない」。

私は、よくモンゴルに調査に行くのですが、あるとき、現地のお宅にお世話になりながら調査をしたことがありました。ある日、そのお宅のスレンさんという奥さんが、私を山菜採りに誘ってくれました。一緒にギョウジャニンニクを採ったのですが、地下の部分を食べる日本と違って、モンゴルではギョウジャニンニクの葉を摘んで食べます。そのときにスレンさんが言ったことばがとても印象に残りました。「（えー）」。

東北地方で山菜採りを楽しむ人も、同じことをよく口にします。自然へのこうした姿勢は、アイヌの物語にも、よく表れており、『アイヌ語の贈り物』にも読み取ることができます。私はこの本を読み進めていて、ギョウジャニンニクについて書かれたページで、<sup>③</sup>声をあげそうになりました。

ある村で、立派な家の奥さんが急病になりました。それを知った貧しい家の少女は、山菜をもってお見舞いに行きました。お見舞いに行った奥さんの家で、娘はギョウジャニンニク、ウバユリ、ヤチブキという三人の植物のカムイ（神様）の言葉を聞きます。それによれば、その奥さんは山菜を採りに行くとき採り尽くしてしまい、持ち帰ったものを腐らせるので、カムイが罰を与え病気になったのだということでした。そのカムイの話の中に次のようなことばがあります。

「この世界には人間ばかりが生きているではありません」。

私たちはアイヌの社会、文化、歴史などをほとんど学ぶ機会を与えられていません。私も不勉強ですが、はっきりしているのは明治政府が北海道を開発する過程でさまざまな形でアイヌの生活を奪ってきたということです。世界的にみれば、ヨーロッパ文明による、たとえばアメリカ、アフリカ、アジアへの侵入によるものと同じ図式です。

ここでは政治や戦争については触れないで、自然についての態度を考えたいと思います。ヨーロッパのキリスト教世界は人間を神の姿をした最高の被造物とし、地上の動植物を支配する責任があると考えました。そうした文化の中で、自然から人間に役に立つ物を見つけ出して利用することを「開発」と呼び、よいことだと考えました。高い山に登ることを「征服」と呼び、宇宙に行くことを「ミッション（使命）」と呼ぶことから、その精神が読み取れます。（A）、自分たちの文化を一番と考え、アジアやアフリカ、アメリカなどを低くみていました。地元の人たちになじみのある山や湖などを見つけると、「人間の発見」と言い、勝手に名前をつけたことも、その表れでしょう。エベレスト山も、ビクトリア湖も、マッキンレー山もそうした名前の例です。

近代以降のヨーロッパの人々は、他文化の人々が持つ、自然に対する異なった考えを、迷信であるとして切り捨てました。たしかに迷信があったことは事実で、（B）、日食の原理を知らない社会の人々は世界の終わりが来たことと恐れおののきました。ところが、ヨーロッパ人はそれを自然の原理を理解しない愚かな態度だと断定しました。人類史の中でヨーロッパの文明と文化の果たした役割はきわめて大きなものがあり、私たちもその恩恵にあずかっています。その科学的な姿勢は高く評価されますが、一方で、自然に対する姿勢という面では他の多くの文化より傲慢な面があると感じます。

二〇世紀の後半になって、人口が増え、環境問題が発生し、資源やエネルギーの枯渇が大きな問題となってきました。地球が有限であることに人類が初めて気づいたのです。人口が増え続け、物資やエネルギーを浪費し続けられれば、限界があるということ



がまぎれもない事実であることがわかりました。

そうした動きの中で、地球を我が物顔で支配するような態度はまちがっているのではないかということに気づいたのがレイチエル・カーソンでした。その叡智は④世界を変えるほどの影響力を持っていました。もちろんカーソンが突然現れて、何もないところからそういう認識に到達したわけではありません。多くの先人が研究して積み上げてきた学問や、思索によって深められた哲学を彼女が学んで到達したのです。

( C )、そうした欧米の文化の到達点とも言えるすばらしい自然観は、皮肉なことに欧米人に蔑視されてきた少数民族が当たり前に持っていたものでした。アイヌの人々にとって、世界は人間だけのためにあるのではないというのは、当然すぎるほど当然のことでした。先にあげたカムイのことばの中に、欲張って山菜をとり尽くすことだけでなく、家に持ち帰って腐らせることを戒めることばがあります。これは食べられないほどの食料を買い、食べ物を大量に廃棄している私たちの生活への警告と読むことができます。食べ物はわかりやすい例ですが、もちろんそれだけではありません。

大和民族は欧米のようになることを「近代化」とする一方で、アイヌ文化を無視するどころか蔑視してきました。アイヌ文化を法的に認めたのはなんと明治維新から約一二〇年も経った一九九七年のことなのです。

それにしても、自分たちの国に古くから住む人たちに学んでいけば、日本列島の自然にこれほど迷惑をかけなくてもすんだと思うと、複雑な気持ちになります。私たちは⑤アイヌ文化に流れる自然観を謙虚に学ぶべきだと思います。

(高槻 成紀『動物を守りたい君へ』より)

問一 本文中には次の一文が抜けています。どこに入りますか。直前の十字を抜き出して答えなさい。

熱帯林の樹木を大量に輸入していること、中近東から膨大な量の原油を輸入していることもまったく同じことです。

問一 本文中の（ あ ）（ ・ ）（ い ）には同じ言葉があてはまりません。本文中から三字で抜き出して答えなさい。

問二 本文中の（ う ）（ ）にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人      イ 虫      ウ 魚      エ 鳥

問四 本文中の（ え ）（ ）にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 葉っぱは全部とるのよ。余っちゃったとしても、しっかりと保存しておけば大丈夫だから

イ 葉っぱを全部とっちゃだめよ。来年もとれるように、少しだけ摘んで、あとはとっておくの

ウ あなたの国でとるようにとりましょ。葉っぱのところは全部捨てて根っこのところだけね

エ めったにとれない貴重な食材なの。ここに生えているのは丸ごと全部とっていっちゃいましょ



問九 ——— 線部④ 「世界を変えるほどの影響力」とありますが、世界はどのように変わったのですか、簡潔に答えなさい。

問十 ——— 線部⑤ 「アイヌ文化に流れる自然観」とありますが、次のア～エのうち、その自然観と内容が合うものには○、そうでないものには×を答えなさい。

- ア 生き物の命を大切にし、動物も植物も自分たち人間と同等と考え、自然に対して恐れ、敬い、いたわりを持つ。
- イ 人間を最高位の存在と考え、それ以外の動物や植物を支配するべき立場にあり、自然は征服するものである。
- ウ 自然の原理を理解しようとし、他の文化を蔑視し、自分たちの文化が一番優れているものであるとみなす。
- エ 陸地や河川なども、ただの土砂や岩石の連なりとか水が上から下へ流れるものとは考えず、命あるものとする。

問十一 本文中に書かれている『アイヌ語の贈り物』の内容について、あなたはどのように考えますか。二三百字以内で書きなさい。





受験番号			

氏名	

\*印のところは、何も記入しないでください。

得点	
	*

一

(1)	こわいろ	(2)	こ	(3)	い	(4)	り	(5)	て	(6)	い	(7)	い	(8)	り	(9)	い	(10)	て
(5)	いつい	(6)	未	(7)	然	(8)	混	(9)	成	(10)	単	(11)	刀	(12)	直	(13)	入	(14)	入

二

(1)	エ	(2)	ア	(3)	オ	(4)	ウ	(5)	イ
-----	---	-----	---	-----	---	-----	---	-----	---

三

足裏には、	体中の	ツボが	集まって	います。	手足が冷える	るとか、	足の	むくみなど、	足に関する	なやみ	が多いのも	うなずけます。	足ツボは	全身の各器官との	関連性が高く、	臓器に異常や	機能低下などが	起こ	ると対応する	足ツボが過びん	にな	ります。	そのため、	第二の心臓と	も呼ばれる	ことがあ	ります。
-------	-----	-----	------	------	--------	------	----	--------	-------	-----	-------	---------	------	----------	---------	--------	---------	----	--------	---------	----	------	-------	--------	-------	------	------

\*実際の解答用紙はB4判です。

各2点×5

小計	二
	*
	10

各1点×10

小計	一
	*
	10

小計 三

\* 20

